

共同研究会「身体イメージの想像と展開」を立ち上げて

安井 眞奈美

国際日本文化研究センターの共同研究会に、オプザーバーとして参加された方から、次のようなメールをいただいた。「様々な分野からの学際的研究と、皆様が和気藹々と自由に発言していらっしゃるご様子に、深く感銘を受けました」と。主催者としてあまり意識したことはなかったが、自由に発言できる雰囲気は確かにそうかもしれない。これまで参加した海外を含むさまざまな研究会の中には、限られた人しか発言できなかつたり、発言が憚られる雰囲気があったりするようなものも存在していたからだ。

共同研究会とは、国際日本文化研究センターのもっとも重要なプロジェクトの一つで、特定のテーマについて、国内外の研究者が集まり集中的に議論を深め、成果を公表していく取り組みである。二〇一七年に日文研に移った私は、さっそく二〇一八年より三年間の計画で共同研究会を開始することとなった。これまで民俗学や文化人類学の立場から出産の研究

を進めてきたので、次は身体そのものを捉えてみたいと考へ、テーマを「身体イメージの想像と展開——医療・美術・民間信仰の狭間で」とした。身体の研究はすでに多くの分野でなされているので、おもに凶像や儀礼を素材にして研究を進めることにした。

共同研究会のもう一人の代表者は、日文研に外国人研究者として滞在されていたローレンス・マルソーさんをお願いした。マルソーさんは、ニュージーランドのオークランド大学で日本の近世文学を研究されている。海外の研究動向も視野に含めて共同研究会を開催すべく、マルソーさんにご協力を仰いだ。

なるべく多彩で異なる学問分野の研究者に参加してもらうため、公募を行った。知り合いの研究者だけからなる「仲良し研究会」では困るのだ。まずはマルソーさんに、海外の日本研究者のネットワーク、文学研究者のメーリングリストなどを使って広く呼び掛けてもらい、研究者を募った。また私自身も、リクルート活動に勤しんだ。さまざまな研究会や学会、懇親会に積極的にでかけ、おもしろい研究をしている人を探した。

その一つが、二〇一七年夏に東京藝術大学で開催された美

術解剖学会である。学会には美術史や医学、歴史学、芸術学などさまざまな分野の研究者が参加し、たいへん興味深い研究発表が続いた。その際、近世の解剖図を美術史の視点から分析していた若手の研究者に出会った。自らも作品を描き、ネパールで若手の芸術家たちと一緒に展示を行うなど、ユニークな活動をされている木森圭一郎さんである。懇親会で声をかけ、新たに発足する共同研究会の概要を説明し、すぐに参加を快諾してもらった。

重視したのは自然科学と人文社会科学を融合した共同研究という点である。理系と文系の研究者が対話を重ねることで、想像もなかった成果が得られるかもしれない。そのような新たな発見の場に、私自身も立ち会ってみたかった。

知り合いの研究者を通じて、理系の研究室をいくつか訪ねてみることにした。京大のある研究者の方からは、多忙な中二〇分の時間をいただき、具体的にどのような研究課題に取り組むのかを説明しようとした。とは言え、明確な結論が見えていくわけではなく、むしろ共同研究会を通じて新たな地平を開拓したいと考えていたので、緊張もあり説明はしどろもどろとなった。すぐに時間が経って、その方は次の面談のため研究室を去って行かれた。あとに残された私は、研究室

の創設前から助手をやっています、という「研究室の主」のような品の良い女性が煎れてくださったお茶をいただきながら、別の研究者の方と話が盛り上がり、厚かましくも研究会に来てもらう約束をした。

文系、理系のさまざまな分野の方々による共同研究会となったので、当初、多くの方々が「アウェイ」感を感じておられたようだ。また、日文研のこれまでの各種研究会やシンポジウムに比べて、女性の占める比率が高くなったのも特筆すべきことであろう。私は「身体イメージ共同研究会」のロゴ・マークまで作り、念入りに準備を行った。

三年間の共同研究会では、各年、個別のテーマを設定し、集中的に議論できるようにした。一年目は「身体部位のイメージの解明」、二年目は「身体全体のイメージの解明」、三年目は「儀礼・祭礼・芸能等における身体の使い方とイメージの解明」である。

身体各部位をテーマにした初年度、初回のテーマを「胎児」とした。これまでの私自身の出産に関する研究成果と、共同研究会の初回にふさ



「身体イメージ共同研究会」ロゴマーク

わしく、命の誕生から始めたいと考えた。最先端の産科医療の現状を踏まえたうえで、人々の出産や流産、死産に対する意識の変容を議論するため、発表者には、これまでいっしょに研究を進めてきた、大阪大学医学部附属病院胎児診断治療センターの産科医・遠藤誠之さんと、水子供養の研究を精力的に進める民俗学者の鈴木由利子さんをお願いした。共同研究会の発表では、超音波診断による胎児の画像がクリアに可視化されるようになったことと並行して、三〇年ほどの間に人々の胎児に対する意識も大きく変わっていったことなどが明らかにされた。この成果は、共同研究会終了後の研究書でご報告したい。

日文研の所蔵するコレクションによる展覧会「描かれた「わらい」と「こわい」展―春画・妖怪画の世界」(二〇一八年 細見美術館)を共同研究会の一環として皆で見学し、展示の企画者でもあった石上阿希さん、木場貴俊さんに解説してもらったこともある。折しも前日に沢山美果子さんが発表された、近世の胎児と子宮の様子を描いた絵の展示もあり、実物を鑑賞しながら議論をするという絶好の場も実現した。

共同研究会では、時間の関係で議論し尽くせなかった課題を、次回、掘り下げて取り組むようにした。人文社会科学と

自然科学で理解の異なる概念については自然科学の研究者の方にミニレクチャーをお願いし、全員で理解を深めた。たとえば古今東西、男女の性器をもつ両性具有の人物像が描かれてきたが、これは日本の近世の妖怪画にも見られる。そのことを共同研究会で話題提供したら、京都大学大学院理学研究科生物科学専攻動物学教室の高橋淑子さんが、理系では「両性具有」という言葉は用いず「雌雄同体 (Hermaphrodite)」と言い、そのような状態は決して特異なものではなく、男女のあり方のグラデーシヨンの一つ、と説明された。学部生向け授業のためにご自身が工夫して制作されたDVDを用いて、発生学的に男女の生殖器官がどのように作られるのかをわかりやすく図式化してくださった。海外からも数人の研究者が参加していたので、最新のジェンダー研究の成果を共有し、それについて英語と日本語を交えて、医学、発生学、歴史学、人類学などの観点からディスカッションを行った。またスカイプを通して、海外の研究者の意見も聞くなど、ネットワークはさらに広がった。

この時、オックスフォード大学から参加した文化人類学者のロドルフォ・マッジオさんは、流暢な日本語で堂々と発表された。日本語の学習を始めたばかりであったが、この日の



共同研究会の様子

ために猛練習をされたとのことで、その熱意に頭の下がる思いだった。研究内容は、レズビアンのカップルからも卵子だけを用いて出産を可能にする最先端の研究を人類学的に検討していくという興味深いものであった。共同研究会の様子はレビューとして日文研のホームページに載せている。あわせてご覧いただきたい。(http://topics.nichibun.ac.jp/pcl/ja/sheet/2019/02/12/s001/)。

発表やディスカッション、懇親会の席での対話をもとに、日文研の共同研究会から、グローバルな研究活動も展開している。たとえば二〇一九年四月には、デンマークのオーフス大学で開催されたJAWS (Japan Anthropology Workshop) に、有志とともに参加し、「身体と儀礼」のパネルを組んで発表をした (http://topics.nichibun.ac.jp/pcl/ja/sheet/2019/04/24/s001/)。このように、多様な分野の研究者との対話を基に、さらなるアイデアが生まれている。

二〇二〇年度はいよいよ共同研究会の最終年度となるが、「身体イメージの想像と展開」というテーマで、日文研の所蔵する画像コレクションを中心とした展示を行う企画を計画している。展示の図録は、日本語だけではなく、英語や中国語なども取り入れ、多くの皆さんにお届けしたいと、期待は

膨らむばかりである。

命の誕生、胎児のイメージを初回のテーマとして始まった共同研究会は、身体のさまざまな部位をめぐり、儀礼や祭礼、スポーツにおける身体を吟味し、最終的に「死体」にいきつくこととなる。あるいは「あの世の身体」もしくは、私のもの一つの研究テーマである「妖怪の身体」にまで及ぶのか、それは共同研究会の議論の深まり次第である。今後の展開と、研究成果の報告書刊行にぜひともご期待いただきたい。

(国際日本文化研究センター教授)

共同研究会「縮小社会の文化創造…個・ネットワー ク・資本・制度の観点から」のこと

山 田 奨 治

一年間の準備期間を経て、二〇一九年度から三年間の予定で、タイトルにある名称の共同研究会をはじめた。一〇年ほどまえから著作権法の領域にも足を踏み入れ、いくつかの著作を世に問うてきた。その経験をふまえ、社会科学が弱い日

文研で、社会問題から現代文化を考える研究会を開くことに、いくばくかの意義はあるだろうと考えたからだ。

根本にある問題意識は、日本が避けがたく直面している人口減少と、それに起因する諸事項だ。日本の人口は二〇〇八年の一億二八〇〇万人をピークに、過去に例をみないほどの急速な減少に転じている。二〇五三年には一億人を切り、二一〇〇年には現在の半分以下になると予測されている。

今後、大災害や戦争が起きたり、移民を大量に受け入れられない限り、人口予測が大きくはずれることはないといわれている。前二者は起きてほしくはないし、大量の外国人を自国民として迎え入れる覚悟も準備も、この国にはまだないようだ。

予測どおりならば、二〇〇八年に二二パーセントだった高齢化率は、二一〇〇年には三八パーセントになる。経済成長がままならないなかで、家計の可処分所得は一九九七年から減少しはじめ、二〇一五年には一九八〇年代半ばの水準に戻っている。

人口が縮小・高齢化し豊かさが失われるなかで、社会にさまざまな分断が起きている。富裕と貧困、東京と地方、本土と沖縄、「日本人」とそれ以外、高齢者と若者、健常者と障